

## 家庭の和楽

せめて一家の中だけでも、安穩に平和にあらせたい。それはすべての人の願いであるに違いない。しかしたいがいの家には問題がある。年が改るに当って特にこの問題について考えたい。

一家の和は如何にして成就するであろうか。

答は簡単である。念仏中心の家庭を成就することである。

念仏中心でない場合は、必ず生活は愛中心に営まれる。愛はそのまゝ憎しみを裏に持つが故に、もし愛が形を変えれば必ず、嫉妬、忿怨、不満、呪阻じゅそ、等々の瞋憎の炎となつて燃えて来る。

夫婦は気が合つても、親子の間柄が悪かつたり、姑嫁の間はよくても、兄弟の間が面白くなかつたり、家庭の者はあまりに近しいが故に、一度その間に溝が出来、相反するに至れば、その苦惱もまた深刻である。よし愛し合つたにしても、ほんとうに心が一つになつてはいない。念仏の人になつてみて、はじめてそれがわかつて来る。

信心の智慧を恵まれると、ものわかりがよくなつて来る。したがつて問題になるようなことでも聞き流して問題にしない。念仏がないと、問題にならぬような一言でも問題になつて、家庭を暗くする原因となる。

人間は勉強すれば随分賢いことを頭の中に入れることが出来る。しかし實際問題になると、小さいつまらぬ問題すらなかなか越えられない。古の高慢な武士は、一言一の行き違いでも、人を斬つた。

たとえ、貧困に苦しむような家庭であつても、親は子に、子は親に、心を一つにして仲よく戦いつづけてゆく時には、貧困はかえつて美しいものをつくり上げる縁になる。

たとえ、何不足なく暮している裕福な家庭でも、五欲煩惱のみにものを言わせ、邪見我慢で、親は子を呪い、子は親を責めたのでは、家庭は悪魔の巣になつて、決して人間は幸福ではない。

一家の主人は正しい生活者でなければならぬ。主人の体が弱くてさえ一家中は暗いのに、主人の生活が乱れて来て、甚しく不道義になり来れば、一家は荒涼たる墓場の如くなるであろう。

ましてや、国法に問われて獄舎の人になり、社会的に葬り去られるが如きことあれば、一家は流離の憂目を見るようであろう。私は新聞紙上で、官途の人などが引かれたの、入れられたの、というのを見る度に、その家族衆のことが思われてならない。父を人格者として尊敬することの出来る子供は幸である。夫を人格者として敬愛することの出来る妻は幸である。家の者を泣かせまいとすれば、主人はのろくでもない、正しい道を歩むことである。

主人の信仰の有無は一家の死活の問題である。主人、念仏に生きれば、念仏は一家の家憲となる。

一家の主婦はたとえば大地の如し。樹木も大地に樹ち、家も大地に建つ。虚業の強い妻を持つてついに囹圄れいぎよの人となつた夫がある。一生貧困に悩む男もある。口のよく立つ女を持つて、幾度も家移りしたり、親族中から勘当されたり、夫の社会的地位を台なしにしたりする。

幼くして親に従わず、嫁して夫に従わず、老いて子に従わず、反抗心や、ヒステリー以外に持たぬ女は、家庭の暗やみの中心である。

もし、それ、女の自慢が懺悔にかわり、綺語悪口がみ法の讚嘆や念仏にかわり、愚痴が感謝に、邪見硬直が柔軟に、瞋恚が歡喜忍従にかわつたならば、主婦は一切を生かす源となる。

時に老婆あり、その一言一動ことごとく念仏、常行大悲、真に觀世音の化身かと思われる人がある。出世本懐を全うした幸なる人であり、家の宝と言うべきである。

親は大悲の心を心として子供に向うべきである。百の冷たい叱責よりも、真の慈愛の言葉の一つが、子供の未来を明るく支配する。

その幼心におされた慈愛の印象こそは、他日千里の遠きに至れば至るほど、無形の綱となつて子供を護り、あまりの墮落をせしめない。親を憶う心、そのまゝが故郷となる。齢七十にして、山に杉を植込む親あり。

不幸にして悪い子供を持つた親は、その子供の性格を知りつくして、子供がたとえおちぶれて橋の下に寝る日があれば、一緒に落ちて共に寝てやる覚悟を持つて、愛しきつて育ててゆくべきである。そうした覚悟を持つた時、はじめて親の生きる道が見え、子供が救われるより先に親が救われて荷物が軽くなる。その徹した慈愛は、いつかは必ず子供の心に徹して、子供を更生せしめるであらう。

たとえ、良い性質の子でも、あまりに親が干渉しすぎて、事々にくちばしを入れていると、かえつて子供は親の心を離れてゆく。しかし、慈愛は、時に放任し、時に叱責し、世界一の恐ろしきものともなれば、二葉をつみ取る鈇はこみともなる。

親は、如来の大慈悲に生かされ、やがて子供を如来の胸中に托すべきである。念仏の子は、親をして安心して墓場に入らしむるであらう。

慳貪邪見な親を持つて泣いている子がある。世にも深刻な苦しみである。しかし、孝道を成就しなくてはならぬことに変わりはない。いかに辛苦でも、まがりくねつても筈たげはのびてゆく。巖上の松は岩を割つて根を下す。

邪見な者は、口やかましく外からたたいたのではますます硬くなり、腹を立て、愚痴になるばかりである。老人になればなるほどこの傾向はひどくなる。

如何に悪逆な親の胸にでも、子供の真心は通じる。合掌して親の心に向うべきである。心の扉を開く鍵は永遠に真実だけである。

家の中心を仏壇におくべきである。つまらぬものには大金を使うが仏壇は至つて粗末である。ラジオや楽器や贅沢な道具がたくさん備え付けてあるのに、仏壇がな

い。そうした家は決して健全ではない。家の構造すら、仏壇中心に考えらるべきである。

主人が中心となつて、一家そろつて、朝も仏前に合掌し、夕べも仏前に集つて勤行する。それをかがさぬ家に、はじめて如来中心の生活が成就する。

仏壇の花は枯れて薪のようであり、いつ供えたかわからぬお仏飯が乾からびている。一年中数えるほどしか仏参したことがない。かかる家庭には必ずどこかに無理がある。未解決な問題がある。

家庭は愛欲貪欲の煩惱の林か、聖なるものの現行したもう光の園か。考えねばならぬことである。

悪逆の家は滅び、積善の家は子孫長く余慶をこうむる。遠き慮おもんばかりあるものにして今を謹む。一家和樂して道を成就すべきである。

家に仏壇あり、朝夕その前に礼拝するが如き家庭は、必ず祖先の祭を大切にする。七世の親及び現在の親に大孝を致すために、三宝に供養する所にお盆の意義がある。日本は祖先尊崇の国である。

念仏の生活が平凡なるが如く、家庭生活もまた平凡なるがよい。念仏道は平凡の偉大である。親まず念仏し、子また念仏し、夫念仏し、妻また念仏し、兄まず念仏し、姉まず念仏し、弟妹これに和して念仏すれば、一家は必ず不滅の和樂を成就するであろう。

されば家をして安らかならめしんとすれば、人に求むることなく、まず一人信心決定して念仏申すべし。